

# 逞筆模試

## ■第二回

三月十四日

### 解答難度指数 1.64

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。①～⑭は音読み、⑮～⑳は訓読みである。

(30)  
1×30

- ① 千村万落**荆杞**を生ず。
- ② 勅諭を以て賜諭せられる。
- ③ 輓かれゆく**靈輜**に紅涙を絞る。
- ④ 風雨震雷、屯戍**檣櫓**として踟躇す。
- ⑤ 宮室を卑しくして、力を**漕漉**に尽くす。
- ⑥ **告訃**の風は長ずべからず。
- ⑦ 溘亡を聞いて**軫悼**に勝えず。
- ⑧ **焦螟**蚊睫に集まる。
- ⑨ 崑崙の疏圃を過ぎ、砥柱の湍瀨に飲む。
- ⑩ **鸞鳩**大鵬を笑う。
- ⑪ 琉璃を以て**釵釧**となす。
- ⑫ 身を脩めて**贄敬**を供する。
- ⑬ 千鈞の弩を以て**潰爛**を射る。
- ⑭ 浮泛として**伏楽**し費消を顧みず。
- ⑮ 木の**罌缶**を以て軍を渡す。
- ⑯ **斗斛**の禄も菽水の飲を得たり。
- ⑰ 嵐風は**樞檻**に激す。
- ⑱ 百年**涸腐**して電光開く。
- ⑲ 大牢を饋し、**纒楽**をもつて餞す。
- ⑳ 台鼎を**譖慝**し、寰内は藉藉たり。
- ㉑ **備細**嚼して四箴を彊記する。
- ㉒ 神を誣うる者は、殃い三世に及ぶ。
- ㉓ 恩倖を蔑して逆鱗に嬰る。
- ㉔ 蟒蛇が**頤**を開いたような洞穴。
- ㉕ 冬枯れで**暈取**られた寒林。
- ㉖ 貽謀澆れて末流を累わす。
- ㉗ 斉整として**蘭蕙**の上に坐す。
- ㉘ 噴嚏して額の皺が縊れる。
- ㉙ 上代に嚮往拘執して当代を誚う。
- ㉚ 目を視るも**眩**まず。

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。㉑、㉒は国字で答えること。

(40)  
2×20

- ① 料峭の候に桜の**ツボミ**が綻ぶ。
- ② 腰に提げた**シヨウジヨウヒ**の中着。
- ③ 日本出来の**フツカン**を堂奥に安置している。
- ④ 長髯の侍は**ヨシズ**張りの茶屋に寄る。
- ⑤ 狐狸の輩に**タブラ**かされる。
- ⑥ **ピクン**を帯びた赭ら顔。
- ⑦ 腹の中を**イツサン**を傾けつつ披瀝した。
- ⑧ 面晤すれば思いの外**ヒヨウキン**な人だ。
- ⑨ 泡銭は魂魄を侵蝕する**バイキン**である。
- ⑩ 一同拍手して誉め**ハヤ**す。
- ⑪ 広大な境内に七堂伽藍が**イラカ**を並べる。
- ⑫ 涙ながらに**カインウ**して寝苦しそうだ。
- ⑬ 師傅に**シンシヤ**して世故を学ぶ。
- ⑭ **シウシウ**運輸の便もない僻地。
- ⑮ 牛皮を**イタ**めて鐔を作る。
- ⑯ 蔬菜と食肉を**イタ**めて夕餉とする。
- ⑰ 優婉**カイレイ**と称すべき空前絶後の名演。
- ⑱ 指揮官に**カイレイ**して独断専行する。
- ⑲ 水場に**キクイタダギ**がやってくる。
- ⑳ 紺の**カスリ**に書生下駄。

(三) 次の1～5の意味を的確に表す語を、次の□から選び、漢字で記せ。(10)  
2×5

- ① 前書きと後書き。
- ② 読書してばかりで実用に移せない人。
- ③ 寒気が厳しく身にしみ入るさま。
- ④ 寛大で、小事にこだわらないこと。
- ⑤ 君主や親などから受けるとがめ。

かんき・しよと・せいれつ  
だいはつ・だつさいぎよ  
もぎどう・らいらく・りんれつ

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1  
次の四字熟語の(①)～(⑩)に入る適切な語を次の□から選び漢字二字で記せ。(20)  
2×10

- |        |    |     |
|--------|----|-----|
| (①) 生鳳 | 老成 | (⑥) |
| (②) 求遠 | 沐浴 | (⑦) |
| (③) 鳳凰 | 兵馬 | (⑧) |
| (④) 偷光 | 含英 | (⑨) |
| (⑤) 応対 | 筆力 | (⑩) |

あそう・けいせい・こうそう  
こうてい・ざいじ・さいそう  
さくへき・じちよう・じよこん  
しよか

問2  
次の①～⑤の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10)  
2×5

- ① 詭弁を弄する。
- ② 良質の金のたとえ。
- ③ 無実の嫌疑をかけられること。
- ④ 天下を治める大法の称。
- ⑤ 賢人が登用されないままであること。

井澳不食・攀轅扞馬・蕙以明珠  
閻浮檀金・罽書燕説・洪範九疇  
譎詭变幻・和羹塩梅

(五) 熟字訓・当て字の読みを記せ。

- |      |       |      |
|------|-------|------|
| ① 杜松 | ⑥ 英倫  | (10) |
| ② 鶏魚 | ⑦ 鉄葉  | 1×10 |
| ③ 天児 | ⑧ 鱸残魚 |      |
| ④ 月代 | ⑨ 鉄刀木 |      |
| ⑤ 香蕈 | ⑩ 金縷梅 |      |

(七) 次の①～⑤の対義語、⑥～⑩の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

- |      |      |      |
|------|------|------|
| ① 雅馴 | ⑥ 鯨波 | (20) |
| ② 休祥 | ⑦ 雀躍 | 2×10 |
| ③ 痛快 | ⑧ 苛酷 |      |
| ④ 草萊 | ⑨ 韋編 |      |
| ⑤ 進攻 | ⑩ 縷述 |      |

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分を選択して記せ。

- |                              |      |
|------------------------------|------|
| ① 生涯は <b>テンボウ</b> に似たり。      | (20) |
| ② <b>コウジン</b> の火傷。           | 2×10 |
| ③ 両葉去らずんば <b>フカ</b> を用うるに至る。 |      |
| ④ 百里樵を販がず千里 <b>ヲギ</b> を販がず。  |      |
| ⑤ <b>リヨウコ</b> は深く蔵して虚しきが如し。  |      |
| ⑥ <b>シヨウキ</b> 大臣の柵から落ちたよう。   |      |
| ⑦ <b>キチヨウ</b> 旧林を恋い池魚故淵を思う。  |      |
| ⑧ <b>サンゼン</b> として頭角を現す。      |      |
| ⑨ 当て <b>コテ</b> なしに左官はできぬ。    |      |
| ⑩ <b>ロウオウ</b> を奉じて焦釜に沃ぐ。     |      |

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送りがないに注意して)ひらがなで記せ。

- |              |      |
|--------------|------|
| ア ① 仍旧…② 仍る  | (10) |
| イ ③ 挂錫…④ 挂ける | 1×10 |
| ウ ⑤ 翳蒼…⑥ 蒼る  |      |
| エ ⑦ 疼腫…⑧ 疼む  |      |
| オ ⑨ 驕溢…⑩ 溢ぎる |      |

(九) 文章中の傍線(1.～10.)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

雪其の形質を美にするのみならず。功用また少なからず。大要十四あり。第一、空気を清うし、汚濁を驅る。第二、已に気を清うすれば、氣即ち涼爽粹純を致す。第三、積雪常に**1.サンテン**を寒からしむ。故に升騰の氣凝集して、水湿を山礫さんりやくに生じ、以て江河の源を養う。第四、冬寒支体きようちたい僵瘰の病、雪塊を取りて、患部に擦揉すれば即ち**ア.愈ゆ**。又**イ.騰雪**水甘くして大寒、天行時疫を解し、一切の瘡毒を療す。その他諸病に於いて、必ず須つ所にし、医家欠くべからず。第五、遍地に覆覆して、寒の土中に侵透するを**2.ボウキヨ**す。地中頼て以て寒冷を致さず。却つて温を得、故に草木肥茂し、**3.チツチユウ**生を得。又雪上に**4.シリ**を走らし、犬鹿を駆使し、重きを引き遠きに致す。故に**5.ホクスイ**雪多きも、害なく利あり。第六、其の質の軽き、**6.ニコゲ**に勝る。故に冬時の蔬穀の、**農脆**なるを損せず、却つて之を擁包して、寒に傷らるるを防ぐ。第七、**ウ.雪蔵**の水雪、夏月鳥魚諸肉の**ニ.餓餓**を防ぎ、水漿を冷やして、收儲暑を延くことを得。いわゆる、氷雪冬時これを蔵し、夏時これを開き、食肉の**禄**、喪祭賓客、用いざること無し。これ亦輔相**オ.調變**の一事、とこれなり。第八、冬日地中より発する蒸気を**カ.遏抑**し、冬天以て暗晦を致さず。若し冬日の地気をして、恣に空に満たしむれば、冬日更に昏暗を致すべきなり。第九、雪中に諸物を生育する。酸塩活機の氣を包含す。故に土地の肥沃を醸す。第十、雪輝よく諸物を照明す。故に北辺に於いて、冬日の暗室を照し、冬夜に明を与う。第十一、積雪尺に盈つれば、**キ.遺蟄**を地下に驅ること一丈。其の春必**露深**の小雨ありて、潤沢**漢洽**し、以て天下の豊年をなす。

(土井利位「雪華図説」より)

**B** 良心は疾呼して渠を責めぬ。悪意は踴躍して渠を励ませり。渠は疾呼の**7.ケンセキ**に遭いては慙悔し、また踴躍の教峻を受けては**8.ゼンタク**せり。良心と悪意とは白糸の恃むべからざるを知りて、ついに**ケ.遑**いに闘いたりき。「道ならないことだ。そんな真似をした日には、二度と再び世の中に顔向けができない。ああ、恐ろしいことだ、……けれども才覚ができなければ、死ぬよりほかはない。この世に生きていないつもりなら、羞汚も顔向けもありはしない。大それたことだけれども、金は盗らう。盗つてそうして死のう死のう！」

かく思い定めたれども、渠の良心はけつしてこれを可かざりき。渠の心は激動して、渠の身は波に盪らるる小舟のごとく、安んじかねて行きつ、還りつ、摒ぎわに低徊せり。ややありて渠は鉢前近く忍び寄りぬ。されどもあえて曲事を行わんとはせざりしなり。渠は再び**9.チンギン**せり。良心に逐われて**コ.恐慄**せる盗人は、発覚を予防すべき用意に違あらざりき。渠が摒ぎわに徘徊せしとき、手水口を啓きて、家内の一個は早くすでに白糸の姿を認めしに、渠は鈍くも知らざりけり。鉢前の雨戸は不意に啓きて、人は面を露せり。白糸あなやと飛び**ロ.スサ**る違もなく、「偷兒！」と男の声は号びぬ。

(泉鏡花「義血侠血」より)